それは素敵な休日の過ごし方　～６日目～

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それは素敵な休日の過ごし方　～６日目～

【Ｎコード】
Ｎ２７８６ＢＡ

【作者名】
阿佐木　零

【あらすじ】
ｐｉｘｉｖに投稿した東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。休暇も終わりが近づいた中、ギクシャクし出した映姫と紫。そんな関係を何とかするべく、映姫は文の写真を使って一計を案じ解決する。

（前書き）

休暇最終日。長い年月を生きるからこそ忘れがちな事が表現出来ていたらいいなと思います。

前日までのあらすじ

紫の悪戯が天を突いた。

□■

朝。

まだ日が昇り始める前の早朝に、私はじっと空を睨みつけていた。

薄っすらと黄色に染まり始める空を小鳥たちが羽ばたいていく。

しかし目的のモノは――まだ訪れない。

じっと。

じっと待つ。

思いついたただひとつの方法を試すためだけに。

こうして空を見上げていると、ゆっくりと明るくなっていく姿がわかる。

夜ならばいつかは日が指し、昼ならばいつか夜が落ちてくる。

そんな簡単で当たり前の現象。

当たり前すぎて気付きにくいのだけれど。

私だって、日々の仕事に忙殺されて気が付かない事の方が多いけれど。

それでも紫にとっては”当たり前”だったのだろう。

外の世界を知り、長い年月を生きる大妖怪である彼女には――

「……来たわね」

その”当たり前”こそが何よりも大切だった。

「～～♪　やっぱり朝の空は良いものだわ～」

「そこの文屋！　止まりなさい！」

「ほへっ？

？ひっ！　なんで貴方がここに！？」

夜明け前の散歩がてら空を飛んでいた天狗だったが、私の姿を見ると身をすくませた後、すぐに反転した。

「あ、ちょ――待ちなさい！」

「まだ何もしてないですー！」

「まだって何よまだって！　いいから止まりなさい、今すぐ！」

「お説教は嫌ですー！　どうせまた細かい事を愚痴愚痴と姑みたいに説教してくるに違いないから嫌なものは嫌なんですー！」

「くっ」

あのクソ天ｇ――もとい天狗、さすがというべきか疾い。伊達に幻想郷最速を謳っていないか……。

でも、

「逃がすわけないでしょうに。

審判『浄頗梨審判―射命丸文―』！」

あれだけ人をコケにした妖怪を逃すつもりなんてあるわけがない。

「ちょ、ええええぇぇ――――っ！！」

逃げ切れると思って油断していた天狗は、スペルカードの直撃を食らい悲鳴を残してボロ雑巾のように落下していった。

――確保完了。

私はゆっくりと落下地点へと舞い降りた。

■□

「そこの天狗、少しいい？」

「？」

きっかけは昨日の夕方。目的の妖怪を探していた私は、木の上に座っていた妖怪に声をかけた。どうやら天狗のようだったので渡りに船。

休暇も残り僅かだったのもあり、慌てて天狗に声をかける。髪の毛を頭の両端で括っている特徴的な髪型の天狗だった。

「何？」

その天狗は気が強いのか、手にしていた”何か”をパタンと閉じて挑発気味に反応してくる。

「貴方の仲間について少し訊きたい事があるのだけど」

「ぶしつけね……ま、いっか。それで、誰について訊きたいの？」

同じ天狗ならきっと探している天狗についてもわかるだろう。
藍と話して考えて――思いついた私なりの答えのためには必要な道具があった。

「射命丸文――彼女がどこにいるかわかる？」

「わからなくもないけど」

天狗は言葉を濁し、私を爪先から頭の上まで眺め回し、

「情報ってのは黙ってて得られるものじゃないわ。ましてや自分に必要な情報ならね。あんたの事は知ってるけど、いくら閻魔でもそれをただで――」

「ただで？」

にっこりと笑みを返すと、その天狗は顔をひきつらせた。

「えっ？　あ、いや、えっとつまり」

スペルカードをちらつかせてみる。

――審判『ラスト・ジャッジm』

「あ、朝！　早朝にあの山の峰を沿うように空の散歩をしてるわ！」
「そう。ありがとう」
「い、いいのよ。全然、全然」
親切な天狗がいたものだ。
私が笑いかけると、天狗も頬を引きつらせて笑ってくれた。
――審判『ラスト・ジャッジメント』
「あにゃあああああああああああああ！」
後ろから悲鳴が聞こえるけど気にしない。
きっと彼女も無償の奉仕の大切さを知ってくれたに違いないのだから。
「――と、いう事があったのよ」
「存分にわかりましたのでその棒切れを肩に押し当てるのは勘弁していただきたいのですが」
「え？」
「え？」

この悔恨棒は罪の数だけ重くなる。それほど力を入れているつもりはないが、天狗――射命丸文にとっては重たいのだろう。
私はペシペシと悔恨棒で射命丸の肩を叩きながら、

「で、用なんだけど」

「近い近い近い近い近いですよ！　顔！　笑ってるのに笑ってないじゃないですか！」

「まぁいいじゃない」

「私としては全然良くないんですけど……」

はぁ、とため息。

「用というのは何です？　残念ながら家の事なら私はお手伝い出来ませんよ？」

「あっちは河童に任せてあるから問題無いでしょう。それより」

「な、何ですかその手は……？」

私は射命丸文を見下ろしながら右手を差し出す。

「……あ、手を貸してくれるんですね。それでは」

バシッ

「あいたぁ！　な、何するんですか！」

私の手を取ろうとした手を叩き落とし、涙目になっている射命丸文に向かって告げる。

「貸しなさい」

「は、はいぃ？」

「カメラを貸しなさい」

「え、えーっと」

どうしてか天狗は私から目を逸らしている。

誠心誠意頼んでいる人に向かって何たる態度だろう。

私は悔恨棒の先で天狗の顔をこちらに向ける。

「もう一度だけ言うわ。良く聞きなさい」

逃げられたら厄介だから空いてる片手にスペルカードをいつでも発動出来るように持っておく。

「ひっ！」

身をすくませたように見えたけど、きっと私の言葉を今度はちゃんと聞く気になったのだろう。

「カメラを貸しなさい」

「は、はい――！」

涙目になってカメラを貸してくれた。
誠心誠意頼めば、こうしてちゃんと気持ちは伝わるのだ。
「ありがとう。大丈夫、どこかの魔法使いと違ってちゃんと返すから」
「いえ、その点に関しては疑ってませんが……一体カメラなんてどうするんです？」
カメラを弄びながら私は答える。
「ふふっ、魔法を使ってみようと思って、ね」

□■

八雲家に戻ると、いつもの光景が待っていた。
「おはよう、藍。今日もご苦労様」
「ああ、おかえり。朝早くから出かけていたみたいだね」
「まーね」
朝早くから出かけた戦果を藍の目でぶら下げる。
すぐに察したのか、得心がいったという風に藍は笑みを浮かべた。
「なるほど。悪くないね」
「問題はどうやって引っ張り出すかなのよね」

うーん、と唸ってみても良い案が思い浮かばない。

「そうだね。普通に撮るだけじゃ意味がないだろうしね」

「……うん。どうしようかしら」

ご飯の匂いに釣られて――ってそんな簡単ならこんなに悩まなくてもいいだろうし。

そもそもただ単に連れ出すだけでは駄目なわけだし。

「ふあ、藍しゃまおはようございましゅ……」

「ああ、おはよう橙。駄目じゃないか、ちゃんと顔を洗わないと」

後は頼むよと視線で求められ、藍と変わる。

紫をどうするか悩みながら朝餉の味噌汁を見ていると、去り際に藍が呟いた。

「何もそう難しく考える事はないと思うよ。毎朝、紫様はどうしてたかな？

さ、行くよ橙」

「はぁ～い」

……毎朝、か。

「うるさかった朝しか思い出せない……」

でも不思議と頭を抱えたくなるような騒々しさではなくて。

ああ、私は結局の所――どうしようもなく楽しんでいたのだなとわかってしまう。

「そっか。そうよね……うん！」

だから気付く。

きっと同じ気持ちでいてくれたのだろうと。

あのどうでもいい騒々しい一瞬一瞬こそが、求めていたものだと。

「――ふふっ、今度は私が攻める番よ！」

ぐっと拳を握りしめて誓いを立てる。

「あわわ、藍様～。四季様が」

「しっ。今は出ちゃ駄目だよ橙」

いつの間にか戻っていたふたりを誤魔化すように、私は大きく咳払いをしたのだった。

■□

日を背負い静かに麩を開けると、お目当ての妖怪はこちらに背を向けて丸まって寝息を立てていた。

「よしっ」

静かに息を飲んで一歩を踏み出す。

足音を立てず、いつスキマで逃げられるかわからないので目標を見失わないよう目を凝らしながら静かに。

やがて覗けた寝顔は普段のオチャラケた印象からはかけ離れたものだった。
穏やかでもなく――どちらかと言えば苦悶のような。少なくとも気持ちの良い眠りでは無さそう。
悪夢でも見ているのか、それてもただ単に今日に限っておかしな夢でも見ているのか。

「まったく」

計画をすっ飛ばして布団でも捲ってやろうかと少しは思っていたけど、完全に消えてしまった。
小声で独り言ち、正面へと回りこむ。

「すぅ、はぁ……」

小さく息を吸い込んで吐き出す。
心臓がバクバク言っているのがわかる。
緊張しているのか、それとも違う理由なのか。

痛い程に鼓動しているけど、右手を胸に添えると不思議と嫌な痛みでは無かった。

そうして私は行動を起こす。
いつものように。
どこかの誰かさんがしてくれたように。

そう、だってこれは――

「仕返しなんだから、ね？」

誰に言い聞かせているのかわからないけど、念押ししておく。
向かい合うように紫の寝ている布団の中へと潜り込む。
紫の体温で暖かくなった布団は心地よく、このまま一緒に眠りたくなる誘惑に駆られてしまうけど、我慢。

「……うぅ、紫の匂いがする」

当たり前といえば当たり前なのだけれど。
頭がくらくらする。

「すぅ……はっ」

いつの間にか抱きつきそうになっていた自分に慌てて気が付き、小さく頭を振って布団から顔を出した。

（わっ――！）

すると紫の寝顔が目の前にあってまた驚いてそれで布団に引込みかけてまた抱きつきそうになるから我慢して、

私は小さく咳払い。

「こほん」

そうして紫の寝顔へと顔を近付けていく。
小さな寝息がこそばゆい。
整ったまつ毛や僅かに紅潮した肌からやがて薄紅色の唇へと吸い込まれていく――

「――あら、大胆♪」

「#%&$#%&$#あｓｘ&%¥%&$――――ッ！！」

急に紫が目を開けた。

上げそうになった悲鳴を必死に飲み込んで、涙目になりながら睨みつける。

いつもならきっとそこで終わる。

そうして私たちの”いつも通り”が始まる。

でもそれは永遠ではないから。

ずっとずっと続いていくものではないから。

――ううん。

今から私がしようと思っている事も永遠じゃない。

証として。

誓いとして。

何度も。何度でも。

忘れそうになる度に。

掠れてしまいそうになる前に。

私は――私たちは伝え合うのだろう。

「えっ、あ、ちょ――映姫？」

予想だにしていなかったのか戸惑っている紫。

ざまあみろ。
内心ほくそ笑みながら目を閉じる。
「お返しよ、紫」
次の言葉が紡げないように、しっかりと唇で蓋をして。

□■

紫を連れ立って外に出ると、藍と橙はもう準備を終えていた。
「ふむ、使い方がいまいちわからないな……」
フレーム越しに橙を収めながらボヤく藍。
パシャパシャとしっかりシャッターを押している辺り、言動が一致していない。
既にマスターしているに違いない。
「私たちにとっては短い時間しか残らないだろうけど」
こちらに気付いた藍に向かって手を振る。
「また撮れば忘れないでしょう？」
小さく振り向いて笑う。
扇子を広げ、目元から下を隠すように覆っていた紫だったけど、
「――そうね」

パチンと小気味良い音を立てて扇子を閉じ、

「積み重ねていけばいいものね。たったそれだけで良かったというのに――」

長く生きるものじゃないわ、と紫は笑った。

私は何も答えずに歩き出す。

すぐ後ろからついてくる足音を耳にしながら――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2786ba/

それは素敵な休日の過ごし方　～６日目～

2012年1月7日01時48分発行